

特集・情報化社会と市民⑦

# 対談 情報化社会・横浜の展望

安田寿明 寄藤昂

——情報化社会の将来  
二——情報都市・横浜の将来

寄藤 ここでは、大きく二つに分けて話を進めていきたいと思えます。一つはコンピュータ技術、情報技術の展開がこれまでどうであり、これからどうなっていくのか、さらには、そういう技術の将来を含めて情報化社会の将来像はどういうようなことです。もう一つは、そのような変化のなかでの横浜市の将来は、ということですね。

一——情報化社会の将来

情報化の文化と風土

寄藤 二十世紀というのは、コンピュータの時代、コンピュータが生まれて育ってきた時代だっ

たという認識を私たちは持っています。アメリカを中心にして世界的にコンピュータが発達して普及してきたプロセスと、日本でそれをある時期追いかけて、追いついたのか追い越したのかわかりませんが、そうしたなかで、果たして何か本質的な違いがあったのか。それから、ハードとソフトの問題。日本の場合、どうもソフトの面が少し弱いのではないかという気がしています。

安田 それにはいろいろな側面があつて、一概にはいえないと思えます。例えばコンピュータだけの技術的な発展を例にとってみると、横浜市を含めて神奈川県は、国産コンピュータの発祥の地なのです。意外とそういう点は知られ

ていない。ミナトヨコハマは随分宣伝されるけれども、コンピュータ・ヨコハマというのは全然宣伝されない。

日本という国は、エレクトロニクス技術に関しては非常に恵まれた立場にあるのです。どちらかといえばエレクトロニクスの技術は、明治維新で外国に既に発達してきたものを持ってきたという、そういう観念が皆さん一般に強いのですが、これは実は間違いで、明治維新の開国と、欧米での電気通信、エレクトロニクスの発達とはほぼ同時期なのです。だから、日本はそういう点では開発されて間もないものをすぐ移入してきた。

典型的な例が電話です。電話はグラハム・ベ

安田寿明氏

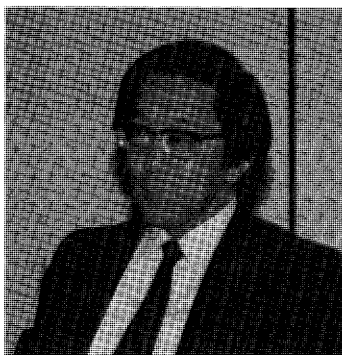


タ、これは国産の最初のトランジスタコンピュータで、神奈川県庁に第一号機が納

ルが発明したのですけれど、当時のウエスタン・ユニオンという電信会社、本来の意味の主流の電気通信事業には全く受け入れられなくて、彼は失意のどん底にいたのです。それを買い上げたのが日本人で、三井財閥の番頭をやっていた、作曲家の團伊玖磨さんのご父君なのです。買上げた電話を横浜へ荷揚げして実験してみせたという、そういういきさつがあるのです。欧米でのエレクトロニクスの開発と日本とは、開国以来ほぼ同時期に歩調を合わせてやってきた実績があるのです。

だから、コンピュータも、アメリカでコンピュータらしいものができたというニュースが伝わると、それを神奈川県内で独自に組み立てた人がいまして、それが国産初のコンピュータということになっている。また、日立の戸塚工場で製造されたHITAC三〇一〇というコンピュー

寄藤昂氏



められた。その辺もアメリカにそう引けはとってない。ハードウェア的に

リカから一年、二年おくれで大体ずっと続いてきている。ソフトはよくおかれている、おくれるといわれているのですが、本来の意味での役に立つソフトウェアというのは、その国のカルチャー、伝統がないとつくれませんから。

私がいつも例に引くのは、例えば非常に単純な給与計算ですね。日本企業の給与計算のプログラムは日本人でないと組めないわけです。どこの世界に会社がかかって税金を取り立てたり組合費を徴収したりしているところがあるでしょうか。そういうのを給与計算の中に組み入れてある。そういうプログラムは欧米人の感覚では絶対つくれない。日本人が当たり前と思う生活カルチャーの中に育っている技術者でない、そういうソフトウェアはつくれないわけで、欧米人の技術者につくらせようとすると、根本からかんで含めるように教えないならならぬ。

だから、応用ソフトウェアに関する限りは、その国の持って生まれたカルチャーというものをそのまま再現していますから、それはもう全く問題にならない。

問題は基本的なソフトウェアで、なかなか日本独自のいいものがつくれないというところがあるのです。ソフトウェアというのはものを書くのと同じなのですが、日本人というのは、こういうカルチャー的な仕事では共同作業が非常に不得手なのです。これはもう本質的にそうだと思います。基本的ソフトウェアというのは、個人の能力では限度がありますから、共同でつくっていくのですが、そういうところが不得手であり、その点ではアメリカに一步立ちおくれるわけです。これは永遠に続くのではないかという感じを私は持っています。

また多少生産力が増強されてきて、日本の社会でもむだなことが許されるようになってきたのですが、まだまだ社会全体としては効率主義で動いていますから、むだなことをやっている和社会的に排除されるという傾向がかなり強いわけです。基礎技術、基礎研究に関して日本はおくれているとよくいわれますが、それも基本的なソフトウェア開発でアメリカにおくれる一つの原因ですね。

先端的なことに関しては、アメリカ人という

のは確かにすぐれた才能を持っていると同時に、もう一つ、環境づくりに才能を発揮する人がグループ作業の中に必ず一人いて、一生懸命研究する人をサポートする。お金を一生懸命集めてくるといふ人が随分いるわけです。日本ではどちらかといえば、お金集めのうまい人は軽べつされ、清貧の中からいいものをつくり出す人が本場に偉いのだという考え方がどうも支配的で、なかなか世界の中でトップを行くほどの技術が生まれにくい素地だということではできないと思います。

寄藤 逆に今度お金集めのとてもうまい人が強い力を持つと、経営的な面が強くなりすぎて、突出した創造的な才能を余り評価しなくなったりしますね。

安田 どうしても足を引っ張ると言いますか。

大学の場合をお話ししますと、日本の大学の研究者に対する研究費というのは、例えば大学独自の研究費とか、それから、文部省の一般科学研究費、これは年に三百五十億円というかなり巨大な額です。それらの分配体系というのはかなり不平等というか、重点研究開発目標にはたくさん額を配付するという、そういう仕組みになっているわけです。これをやめると随分いわれているのです。アメリカ並みに業績で配分してやれと。

ところが、アメリカでの研究資金の配分法は、要するに研究計画を非常にうまく立てる人がうまくお金を取る。実績もいろいろ評価されるわけですが、実際、科学研究の成果というのは、だれが評価するのかという非常に難しい問題がありまして、本人ができた、できたといえ、それを信用せざるを得ないという面もあるわけです。そうすると、こういうことをしたいという俗にいうプレゼンテーションの技術にだけた人がお金をたくさん取る。

だから、よく笑い話にいうのですが、口のうまいプロフェッサーは王侯貴族の生活をしている。ところが、本当に実力があっても口下手な人はまさに赤貧洗うがごとしで（笑）、競争社会の厳しさの現実というのを見せつけられる思いがする。さらにこれはアメリカ国内でも若干批判はあるのですが、大学教授の兼職が自由に認められています。だから、大学教授をやりながら、例えばベンチャービジネスの社長をやって大金を稼いでいるというような人は、私の友人でも何人もいます。

それに関連して一つ思い出したのですが、日本はまだ労働時間が長い長いといわれているのですが、実態はどうかというところ、日本の企業では兼職を認めていないのです。だから、ある企業に雇用されたとなると、それはもう丸抱えで、

ほかの企業に勤めていることがわかると、即座に解雇される理由になるわけです。

ところが、アメリカはそれほど労働協約がはっきりしていません。ムーンライター、直訳すれば月光族ですが、日本でいうアルバイトというのがいます。昼間きちんとした企業に勤めて、夜になって夜勤専門の勤務で働く。例えば半導体工場のプロセスプラント製造工程の監視だとか、あるいはもっと単純な労働でいうとガードマンだとか、いろいろありますけれども、そういうので働く。本職の方は夕方五時に終わつたとすると、六時からムーンライターの職業に入って、午前一時まで勤務する。ほんの少し睡眠をとって、翌朝また本業の方の仕事をします。そういうふうのべつ幕なしに働く人もいます。これは労働統計ではとらえられない実態でもあります。

そういう人たちの考え方というのは、若い体のきく間にうんと稼いで、年金の元手を大きくしておいて、できるだけ早い時期にリタイアして、あとはバハマ諸島でヨットにでも乗って暮らしたいと。これも一つの生き方で、太く短くで、あとはのんびりと。

そういう生活は日本では絶対許されないのです。その辺が日本の社会の一つの特徴で、そういう異端児の存在を絶対許さない。だから、休

むならみんな一斉に休む、働くなら一斉に働くという、そういう考え方からどうもまだ脱却できない。その脱却できない理由というのは、これだけ情報化が発達していても、アメリカ人のさまざまな生き方、そういう情報が伝わってきてないということです。その辺にも非常に大きな問題があるという感じですよ。ですから、情報化、情報化といっても、私たちがこれから学ばなければいけない、あるいは取り入れなければならぬ情報は山ほどあると思うのです。

寄藤 おっしゃるとおりで、私は会社二つと学校二つにほぼ平等に勤務しているのですけれども、それだけでもほとんど化け物扱いされますから。

それと欧米人の経営者、役員職、あるいは主任技術者クラスの労働というのは、一緒に仕事をするとわかるのですけれども本場にすぎいですね。

安田 特に欧米人はすごいです。アメリカの企業の中で、徐々に数は少なくなっていますけれども、まだそのパワーが残っていると思うのは、清教徒の俗にワスプと呼ばれるホワイト・アングロサクソン・プロテスタント。かつてのアメリカというのは、あの人たちが重機関車になって、長い長い貨物列車を牽引してばく進していったというのが社会の構図だったわけです。それ

に対して日本の場合は、集団で行進していくという、そういう考え方ですから、若干違うなあと感じます。

大体重機関車になっている人たちの働きぶりを見てみると、これはやっぱりビフテキとお茶漬の差だという、太刀打ちできないというのが率直な感じですよ。

### 「情報摩擦」について

寄藤 特にソフトをめぐって、このところ著作権とか知的所有権とかいう問題で、アメリカとのトラブルがあるようなのですが

安田 アメリカも、公式的な面とそうでない面とがあって、アメリカ国内でも、ある分野での著作権無視、コピーの横行というのはもう目に余るものがあります。アメリカ合衆国というのは伝統的にそうですが、自分たちの失敗したことを二度とやらせないように、他国に対してはいい教師になろうとするわけです。日本の占領政策の中で民主化の政策というのは完全にそうでした。だから、今、アメリカ国内で、私たちの見えないところで非常に大きな社会問題化していることを、日本ではやらせたくない。それに、日本にやらせると、アメリカ自身もつとひどい打撃を受ける。そのところが、彼らが非常に強硬にしている一つの理由でもあります。

ます。

ただ、私は知的コストで払うべきものは払って構わないと思うのです。同じものを日本で開発しようとすると、それにかかるコストというのは膨大なものですから。むしろ向こうのいうとおり払った方が安上がりの場合もある。ただ、基本的には、アメリカ人も個々の場面になってくると、ビジネスですから、全然使い物にならないものでも高く売りつけるというところがありますから、だまされないだけの知恵というのは絶対必要なわけです。リーズナブルな値段のものをきちんと買うということは、大変重要なことです。

払うべきものは払っても安くつく場合が随分多いわけですから、私はそんなに気にすることはないと思います。それで日本がアメリカに知的に支配されるという、あるいはいつまでも私たちは知的に彼らに追従しているというようなコンプレックスからは、もう脱却してもいいのではないですよ。

寄藤 日本でソフトウエア会社を経営しているビル・トッテンという人が、割とおもしろい発言をしていますね。

安田 そうですね、ビル・トッテンは日本のものを輸出しようとする、アメリカ国内の方がはるかに厳しいといっています。私もそれは痛切

に感じます。アメリカは連邦政府の規制は非常に緩やかなのです。けれど、地方自治体の規制にはものすごいものがあります。だから、普通の一般家庭で使っている家電製品から高度のエレクトロニクス製品に至るまで、地方自治体でのレギュレーションをクリアするためにはものすごい開発投資、あるいは検査投資というのが必要です。日本はそれをやってきたわけです。

ところが、アメリカ国内ではそれは見えないわけです。日本は国全体としていろいろなレギュレーションがあるからけしからんというような問題になってきているのです。その辺は少し相互に理解する努力が足りないのではないかと思います。そう感じますね。

それから、これは脱線するかもしれないけれど、私はアメリカの考え方にも少しひどいところがあると思います。例えばコンピュータ製品をアメリカから買うとして、それを組み立てているビス、ナットが全部インチ規格なのです。これを製造販売しているのは現在アメリカとカナダだけです。ほかの国は全部メートル規格なのです。機械をばらして再組み立てするときに、ねじ一本、ビス一本、ナット一つ失うなと学生たちに厳しくいっています。失ったらえらいことになってしまいます。日本のものは合わないのです。無理やりはめ込んでねじれば、もう

ガタガタになって、二度と組み立てられない。そこでもし失ったとすると、たかだかナット一つ、ビス一本をアメリカから取り寄せなければならぬ。

また、電気通信の規格もよく問題になるのですが、例えば日本にいるアメリカ大使館員が心電図を伝送しようとしたら、規格が合わなくてKDDに断られたということが『ニューズウィーク』に書き立てられて、日本の閉鎖性が問題になった時期がありました。電気通信の規格はアメリカ、カナダだけが世界の中で別規格で、ほかは、日本も含めて国連の専門機構である電気通信連合規格(CCIITT)を採用しているわけです。

寄藤 アメリカとカナダはベル規格ですね。

安田 そうです。実は当のアメリカ人がそういったことを知らないのです。アメリカ国内で使っているものは、全世界がみんな標準として使っているという、そういう思い込みがあるのです。その辺の誤解も解いていかなければならないという問題もあります。

#### 情報化社会と人間

安田 私の自宅はたまたま旧東海道の国道1号に面していて、そこで見てみると、とにかく日本の国際化の現状というのがよくわかります。

前の道を船用コンテナが通ります。昔はアメリカだとか日本のKラインだとかという船会社のコンテナばかりだったのですが、最近、非常に目立つのはエバグリーンで、これはたしか台湾だったと思います。それから韓国のヒュンダイのコンテナも数年前から通勤途中に走っているのを見かけるようになりました。

私にはコンテナの積み荷だとか、走っているトレーラートラックを見て、神奈川県内のどこに行くのか行き先も見当がつくし、ああいう会社がかようなところと取引するようになったというところで、日本の置かれている経済の情報化、国際化というのを、肌で感じるわけです。これはやっぱり港町に住んでいる一つの特権なのかも知れません。

交通、地理と、それから経済、情報化、シビリゼーションというのは、本当に不即不離というか、一体化しているということを痛感します。寄藤 それはどこへ向かって行くのでしょうか。一つは、今いわれた、情報化というのは実は国際化と完全に背中合わせで、グローバルズムみたいな格好で動いていかなければならない。それから、もっと狭い範囲のことでは、外国

からも衛星放送がみんな見えてしまうというところや、情報侵略みたいにいわれている問題であるとか。それと、狭義の情報技術について、技

術そのものが一体これからどちらに向かっているのかということ。それは産業面でもあるし、私たちの生活面、ライフスタイルにかかわってくるような部分でもあると思うのですけれど。

**安田** 極端な話でいえば、私は個人としての実感では、二十一世紀は真っ暗だと(笑)、そういう気持ちを持っているのです。それは、まず理工系の進学者が、若い人たちの中で必ずしも優秀な人たちがばかりとはいえないのです。これはオイルショック以降から、京都大学、東京大学あたりでも大分問題になっているのですが、高等学校までの成績で優等生といわれている人たちは、理工系には来ない。ほとんど法学部です。

社会のブレイクスルーというような革命的な進歩を起こすのは、アインシュタインとか、そういう例をみてもわかるように必ずしも優等生ではないのですが、それを恒常的に導いていく、そういう制度的な運用というのは優等生がいらないとどうしようもないのです。それがほとんどの優等生が、いわゆる法学部、経済学部の順に進むようになって、理工系はほぼ物好きでないと来ない。そういう傾向がここ数十年非常に強まってきている。だから、必ずしも理工系はいい人材を、社会の若い人の中の一番組ぐれた人材を集めているというような状況ではない

くなってきたということ。これが一つです。

それでは、そこで育った人たちがこれから世の中に出てどう活躍をするのか。これは情報化の一つの欠点ですが、全部バーチャルワールド(仮想世界)で働いています。つまりシミュレーションによって我々が教育し、シミュレーションによって設計開発やクリエイティブな仕事をさせるといふ。そうでないといふ時代には、そういう時代に来ているわけです。実際に物を与えて、それで何かを作らせるといふようなことでは、今の進歩したテクノロジーに全く対応できない。

そうすると、非常に単純な例をいえば、CRTのブラウン管の画面の中にある素材を、左上から右隅に移動してくっつければ、それでその製品の設計図ができるという、そういう時代になってきているわけです。そういう方法でデザインエンジニアリング能力を養成した学生を大学から社会に供給している。社会の中でも、若い人たちの研修のあり方というのは全部それなのです。昔のように職人の親方につけて、実際の現場の仕事でしりをたたきながら技術を覚えさせていくといふことは、とてもテクノロジーの進歩に間に合わないといふ、そういう時代になっています。

そうなる、そういうテクノロジーの中で最終的に打ちかつのは人間の一番原始的なパワーです。アメリカ人はさすがだと思っただけけれども、彼らは根底にプロテスタントの倫理があるせい、いろいろなアメリカ賛美、テクノロジー賛美の物語を展開しながら、最終的な落ちは必ず宗教的なものを持っている傾向があります。例えば「スター・ウォーズ」のようなドラマでも、人間精神の力の力が人間の一番の勝利の源泉だといふような、落ちをつけるわけです。

そういう人間が本来根源的に持っている力が、どうも日本人の中からだんだん失われていくのではない。これは情報社会の一番の欠点です。私たちはそういうところを無批判に、また、見つめることなく突き進んでいっているわけです。それから考えると、二十一世紀は、ある日気がついてみると、本当に頭でっかちになってしまっている、足腰は全然だめで、どうしようもなくなるのではない。そういうおそれを非常に濃厚に持っています。だから、それで二十一世紀は真っ暗だといふのです(笑)。

**寄藤** 実際、よく「停電したらどうなるの」といふ話をしますからね(笑)。

情報インフラストラクチャー

**寄藤** ここから都市といふところに視点を移し

て行きたいのですが、これまでに、通信は交通を代替し得るかといった議論があった時代とか、情報化によって逆に本社がみんな東京に吸い寄せられてしまうのだというような考え方とか、情報都市「みなとみらい21」のような、できるだけどうかわからないけれども考えてみたりとか、いろいろな動きがありました。

現在のまま行ったときに、二十一世紀の都市の姿というか、それが向かっていく方向というのはどうなのでしょう。

**安田** 通信情報交流で現実の地理的交流、つまり、交通だとか輸送が代替できるという考え方はもう完全に誤りです。むしろ、情報交流が盛んになればなるほど、物流、それから人のトリップは圧倒的にふえてくる。これは避けられない運命なのです。だから、そういうときに一番大きな問題になってくるのは土地問題で、情報化を推進していくと、土地の有効利用というのはもつと深刻な問題としてクローズアップされてくる。より広い道路をどのように確保するのかということですが、地方自治体を問わず、国の行政全体で非常に大きな問題となって出てくる。そのかわりに情報通信で賄えばいいではないかという議論もあるのですが、そうはいかないのです。

例えば列島全体、光ファイバーなどで全部ケー

ブルで覆ってしまうということになると、総額三十五兆円ほどの投資額が必要だと、そういう推算もあるのですね。三十五兆円というと、必ずしも通信というものは安いとはいえないのです。それはなぜかというところ、いろいろな議論の中で、例えば私たち通信技術者は、メーター当たり七十銭ぐらいの非常に安い光ファイバーで、テレビ回線が何十チャンネル分というような言い方をするわけです（笑）。それで何となく皆さんは安いものだと思うのだけれど、さあ、それを列島に架設するときに、どこへ架設するかという問題に直面します。

一番いいのは共同溝に収容していくことです。ところが、共同溝を建設するというところになると、道路より高いことになる。率直にいえば、列島全体を地下鉄化するのと同じぐらいの話になってしまいますから、それを簡略化して管路にする。管路というのは、道路の中にパイプを埋めて、その中に電線を通すわけですね。地中化では高くついてかなわないというので、それでは電柱にする。電柱だって建設費は大変ですし、空中架設すると保守経費はより高くなってきます。

いずれにしても、通信路を建設するというのは、道路を建設するのと同じです。通信路の建設投資というのは大変なものになってくるわけ

です。そういう点から考えると、道路交通の充実と通信路の充実というのはどうしても表裏一体になってきます。

「それでは、衛星一発打ち上げればどうってことないではないか」という考え方もありますが、衛星だって、そう無限に打ち上げられるものではないのです。特に通信用に使う静止衛星というのは、赤道上に指定座席がありまして、そこに座るためにはある程度個数が限られてくる。御用済みの衛星を地上からの指令で指定座席から外して、永遠に宇宙の墓場へ送り込むとか、そういう措置を次から次へやっていかなければならない。だから、衛星というのは決して無尽蔵のリソースではないのです。その辺の認識というものもあまり普通の人にはいき渡っていない。今のところ、指定座席を全部使い切っていないので、何となく次から次へ打ち上げられるようなつもりではいますけれども、通信に都合のいいポイントには有限ですから、それを使い切ってしまうばもうどうしようもないという問題もあるわけです。

それと、せいぜい五、六年もつ衛星に対して、一発打ち上げるのに今でも三百億円ですね。また、今のところ通信衛星というのは安上がりな手段ではあっても、それですべてが代行できるとはいえない。ですから、情報化社会というのは

は、社会全体の中での総合的な発展政策、あるいは社会政策全体での絡み合いというものを抜きにして、語ることはできないのです。

### 技術の両面

寄藤 情報化のマイナスイメージとして、それによって一層の管理社会になるという主張がありますね。

安田 管理社会になることは間違いないのですが、だれに管理されるか、さらには、管理されるのが嫌なのかどうかという、その問題に尽きると思うのです。技術というのはみんなそうなのですが、個人の能力をものすごく拡大するわけです。拡大されるから、また、管理も厳しくなるわけです。それは厳しい管理をしないと、とんでもないことになってしまいます。

典型的な例が自動車です。一人の人間が東京から大阪まで旅するというと、東海道五十三次の世界です。まさに日本橋を出るときには水盃で出るというのが、一人の人間のなし得る能力です。それが、今、自動車だったら、アクセルペダルをばつと踏むだけで、スピード違反覚悟で東名を走れば、数時間で大阪まで着いてしまう。そういうめちゃくちゃな能力拡大というのが技術で可能になっているわけです。

それと同じように、情報技術というのを駆使

すると、昔なら考えられないようなことが起ってきている。最近の経済学部の学生は、ゼミのテーマに日米構造協議を選んで、パソコン通信でAP電、UPI電、全部見ながら、日本側とアメリカ側とに分かれてシミュレーションをやっています。私たちの学生のころとは全然違うわけで、私たちの頃は、何か卒論のテーマだとかゼミのテーマを調べるとなると、図書館に三日も四日もこもりつきりで、手書きで一生懸命メモをつくってやっていた。それが、まさに現実に行っている政治ドラマ、政策ドラマと同じようなことをシミュレーションでやるというようになことが可能になってきているわけです。

それに似たような企業の中のさまざまな局面、行政の中のさまざまな局面で、個人の能力というのは非常に拡大されています。ところが、ある誤った操作、ミスオペレーションだとか、ある誤った判断、ミスジャッジというのは、それが今度は社会に及ぼす影響も大変なことになってくるわけです。だから、そういう点では、そうならないように、あるいはなつたとしてもその被害を最小限に抑えるために、管理のシステム、管理の技術というのが非常に重要視されてくるわけです。

もともと自分はそのなりに自己の能力を拡大するのは嫌だから、そんな技術は一切拒否してい

いという考え方、そういう考え方も理念としてはあります。理念としてはあるのだけれども、現実の社会ではそれは不可能な時代になってきているでしょう。例えば、本来自動車というのは、極めて危険な技術ですね。危険な技術だから、自動車は絶対利用しないと拒否したら、これは社会の中では生活できない。本人は乗らないということを一貫するかもしれないけれども、実際上自動車輸送の恩恵を受けられないものは、何一つないといってもいいわけです。そここのころは非常に難しい問題です。

寄藤 多分、基本的に道具だということ。しかし、どうもコンピュータというのは道具を超えた何物かに見えるというようなことがあるようにも思えるのですが。

安田 いや、技術というのは、何もコンピュータだけに限らず、基本的には道具なのです。道具だけれど、その道具を持った効果が、人々の予想に反してものすごく強大なものになることがあるから、そういう点では皆さんが魔性だということがあるのではないですか。

典型的な例が、兵器だと思います。兵器は技術の一つの象徴ですね。武器を持った一人の人間がどういう心理状況になるのかということを考えて、文明社会の中で、普通の市民に武器をとらせるような、そういう状況だけは絶対



つくり出すべきではないと思うのです。

そして、日常的な技術でも、それを使う人たちが実感して扱っていないだけで、それぞれみんな魔性の力をもっていると思います。コンピュータもそうなのです。

## 二——情報都市・横浜の将来

### MM21とウォーターフロント

**寄藤** ここで、もう一度MM21の計画について考えてみたいのですが、市の今までの言い方によれば、横浜市の情報化のセンターにするのだと。一つは本社機能を集めたい。少なくとも情報化というのは単にコンピュータがあることではなくて、意思決定が行われることだという認識にはきた。だから、本社が欲しい。それともう一つは、いわゆる情報産業というものを集めたい。その理由は比較的単純で、成長産業だからだという。

ただ、そこから先少し怪しくなるのは、情報産業の集積というのが一つの都市としての経済的、社会的な力になり得るかどうかという検討が不足している。私自身の見方からすると、あれはかなり従属性の強い産業だから、それだけ集めてもどうもならないのではないかと思っ

ているのです。そういうようなもの見方、考え

方についてはどう思われますか。

**安田** 私は基本的には、ウォーターフロント開発全部ひっくり返していいかと、ウォーターフロントは情報産業には不向きであると思っています。情報通信機器というのは、幾ら光ベースに全部切りかえたとしても、最終的な人間とのインターフェースというのは電子回路になるわけです。電子回路は水を嫌うのです。

私の研究室でも、蒸発型の加湿器以外は絶対使わないことにしています。普通のオフィスで使われている超音波で水を霧にする機械は、非常に便利ですけども、これは絶対使わないのです。それはなぜかというと、水を蒸発でなしに無理やり霧状化しますと、水道の中にもごく微量のシリカ成分が含まれているわけです。これがコンピュータのコネクタだとか回路の中に入り込んで、内部で再結晶して、それが接触不良の原因になったりする。一年間超音波加湿器を稼働させると、スイッチ類などは目も当てられないような状況になってしまうわけです。これは普通の上水道の非常に質のいい水を使っ

ていても、そういう現象が起こるわけですね。それから、インテリジェントビルというのは、いろいろな情報通信機器が内部に張りめぐらされているわけです。ケーブルを引っ張って、なおかつ防火対策をしっかりするという、そういう特別な工法というのは普通のビルではなかなかできないわけです。これは特別な設計が必要なのと同時に、ビルの目に見えない部分、地下の特別高圧電源受電装置であるとか、情報通信回線の洞道と呼ばれる共同溝から地下で情報ケーブルを取り込む装置であるとか、そういった地下構造が非常に大きな問題になってくるわけです。ビルとビルを結ぶ洞道だとか共同溝自体もウォーターフロントのような地盤が軟弱なところどうまくつくれるのかということも問題です。

**寄藤** 横浜の場合にはもともと、不幸な歴史的背景があつて、いわゆる産業の中枢部分というのは余りない。そこで多分逆転の発想があつて、機能を集める一つのきっかけにしようというくらいもあると思うのですが。

**安田** 私は、市の今までのあり方は、MM21のようなウォーターフロントにしても何にしても、少し「港」という言葉にとらわれ過ぎていると思うのです。横浜を象徴する、内防波堤の赤灯台、白灯台も今は、ベイブリッジから見ると、箱庭の中にちよこんとある赤蠟燭、白蠟燭という感じで、少なくとも赤灯台、白灯台のいわれ、因縁を知っている人というのは、古い横浜人以外はいないのではないかと思うのです。それと同じように、港町ということについて、象徴的

な意味は別としてそろそろ横浜は脱却してもいいのではないのでしょうか。むしろ、別の意味での情報化の都市のあり方というものがあるのだからと私は思っています。

**寄藤** なるほど、港へのこだわりと、ウォーターフロントとしての理想的な開発のありかたとは必ずしも一致しない、ということかもしれませんね。

**安田** 横浜のウォーターフロントの一番の失敗とは、大きなリゾート地域を確保しておかなかったことだったと思います。

根岸地区の海岸が開発される前は、磯子プリンスホテルが私の好きなホテルでした。随分長い間改築をやっていて、ごく最近オープンしたようですけれども、昔の磯子プリンスホテルから眺めた海を思い出すと、今の磯子はもう考えただけでぞっとします。あの辺にもう少し大規模なリゾートエリアというものをつくっておいたら、横浜のウォーターフロント計画というのは相当に違っていたのではないかと思えます。

東京の場合は、その辺がまだ救われていて、十三号地にしろ、夢の島にしろ、わりあい緑と共存するような形でウォーターフロントをつくっているわけです。残念ながら、横浜は、とにかくスタートポイント、立ち上がりが遅かったせいから、非常に重化学工業重視のパターンで

海辺開発をやってしまった。唯一残っているのは金沢八景近辺という感じですから、ポイントとしてのリゾートは確保しているけれども、面としての安らぎというか、そういうものがなかなかない。

そういうところで情報通信、情報産業というのは少し無理なので、MM21の場合は、東京都内でのオフィススペースの需要不足を補完するという意味の方が意義深いだろう。そういう機能は十分あるのだからけれども、それがコアとなっていて、横浜の経済力を発展させていくだけの吸引力となるのは難しいのではないかと思っています。

#### 246ゾーンの魅力

**寄藤** それでは、横浜のこういった面に新しい展望を感じられますか。

**安田** 私は、専門のパーソナルコンピュータを開発しているころ、約十年間にわたって、二カ月置きにアメリカのシリコンバレーへ出かけており、向こうにもたくさん友人がいます。そのシリコンバレーの中心道路は、エルカミノリアルという道路なのです。

私が初めてシリコンバレーに行ったころのエルカミノリアルというのは、スタンフォード大学からサンノゼのあたりまで自動車走ってみ

ても、周辺は何もなく、ほとんどがイチゴ畑、ブドウ畑、そしてスモモが栽培されている果樹園です。それから少し左の方に折れて、ルート101という道路を超えると塩田がある。そういう風景だったのです。それが徐々に開発されていって、今や世界のハイテクノロジを次から次へ生み出すテクノロジ産業の一大集積地ということになってシリコンバレーという名前が生まれた。そういう地域です。

東京の赤坂見附を出て、厚木に至る246を走っていると、サンフランシスコのエルカミノリアルを思い出します。サンフランシスコというのはアメリカの中でも非常にユニークな街で、あらゆる文化の集積地。表文化もあれば裏文化もある。その表文化、裏文化の一つの集積地の街だと思えます。日本でいうと青山・六本木からスタートして、渋谷を出て、ちょうど用賀のアメリカ村あたりから多摩川を越える。その辺からシリコンバレーに入っていくというような、そういう雰囲気になります。

東京の持っている、あるいは青山通りが持っているようなカルチャーっぽい雰囲気、246に沿ってだんだん西へ延びてきているわけですね。例えば劇団四季の事務所は246の沿線にありますし、徐々に二十四時間都市になりつつある。その先にいくと、新興住宅だとか、田園

風景がまだ残っています。これはまたサンフランシスコと同じで、シリコンバレーに至るまでのエルカミノリアル沿線というのは、比較的富裕な階級の住宅街ということで知られていません。その先に行くとき高い建物はほとんどなくて、大抵が平家か高くて二階建て。そういうオフィスビルがあちこちにあって、そこでハイテクノロジーのリサーチ・アンド・デベロップメント、あるいは情報産業の中核部隊が働いている。そういう街並みが続いているわけです。

私は、246ルートは緑が多く、カルチャー的な発展もあり、頭脳産業、シンクタンク、あるいは情報産業、そういうものが集まりつつあり、新しい文化の芽が出始めている、そして、それが自然発生的にふえていく地域ではないのかと、そういう考えを持っているのです。行政の方は意外とそれに気づかれていないですね。そういう芽をどう積極的に育てていくのか。また、どういふふうな地方自治体が発展する方向にそれをガイドしていけばよいのだろうか。

それから、246ルートには、既に人々の生活の場があるのですが、そうした生活の場に入っている、なじみやすい産業というのが実は情報産業なのです。普通の考え方からいう産業育成とは非常に異なった都市政策というのが展開できると私は思っています。

寄藤 この間、横浜よりいろいろな面で恵まれない地方の小さな市に行って話したときに、ソフト産業の会社が一つ進出してくれるかもしれない、受け入れのためにはどうしたらいいの、という相談を受けました。それで、一番大切なのは働く人々が快適に住んでくれることなので、例えば商店街に努力してもらわなければいけないとか、子供の学校の問題とか、その辺が在来型の産業の工場が来るのとは違いますよという話をしたのです。

安田 例えば若い人のイメージ的な感覚というのも大事で、運転の好きな若い人たちが一番走りたがるルートは、国道134号の湘南遊歩道、それから鎌倉ですね。それに次ぐのが246なのです。16号だとか、あるいは東名だとか首都高を走るの、もうこれはおじんだというような(笑)。トレンディーなのは国道134号、これはもう完全にレジャー志向です。何となく心豊かで、いかにもドライブをしたという感じになるのが246。そういうイメージを持っているのです。

これはテクノポリスを形成する上には非常に大事な感覚なのです。それが、行政だとか都市計画の人は全然わかっていない。だから、テクノポリス振興策という、まずジェット機が飛ぶ飛行場をつくる。そこへ半導体工場を持って

くる。それでテクノポリスだといっているのです。そこへ行くハイテクエンジニアはみんな単身赴任です。単身赴任で金帰月来でやっているわけです。それでは、ウィークデーは何をやっているのかというと、みんなインスタントラーメンか芋しようちゅう。それで、いい仕事ができるはずがないじゃないか、といつも言っているのです。それは基本的には、家族がトレンディーな首都圏を離れたがらない。それから一番の問題は子供たちの学校です。

大体シリコンバレーが成功したのは、とにかくスタンフォード大学をトップに、完全な教育施設があるということが一つです。それからエルカミノリアルやルート101を走ればサンフランシスコへ行つて、一番格調の高いカルチャーから、どうしようもないサブカルチャーまで全部染しめる。

そういう条件をそろえているのは、私は246だといいたい。とにかく、神奈川県の高等学校のレベルはどこでも恥ずかしくはないですし、それから、カルチャーのにおいというのはたっぷりある。しかも、一帯は高級住宅地です。住むのにも職住近接です。大体情報通信産業というのは騒音は発しませんし、唯一問題なのは、半導体を洗浄するときの洗浄液です。これは、半導体の生産工場というのはまた別に移しても

いいので、何も246でやることはないわけです。完全な情報産業だけでやっていける、そういう地域でもあるわけです。

そういう点から考えると、これから非常におもしろい地域になるだろうと、そういう観測を持っています。

**寄藤** 確かに、多摩川から川崎市、横浜市の北部、町田市につづく246沿線は魅力的な街になりつつあると思います。

### 通信と交通と

**寄藤** ところで、最近になって本社が横浜から逃げていってしまう会社があるのです。聞いてみると、本社を東京へ持っていったことで通信コストが三分の一になったという。

**安田** それはあります。

**寄藤** 逆にいえば、今までかけていた電話のほとんどが東京向けだったということですけど、実際には意外に深刻なのです。例えば市がある企業を誘致しようとしたときに、迷う理由の大きな一つになっているのは、045になると高くなるということです。

**安田** 電話料金というのは、基本の算定基準というのは距離制なのですけれども、距離制を個別に算定するのは難しいので、行政区分別に決めているのですが、もうそういう考え方はやめ

た方がいいのではないかと思います。例えばサンフランシスコの場合は、ベイエリア（湾岸地域）は全部同じ局番です。そういう方式にするべき時代になっているのではないかと。特に東京―横浜間の電話料金は非常に高い。距離的にいえば、大田区の一歩端から足立区の一歩端、それよりも短い実質距離しかないのに、比較すれば、片方は三分十円でかかるのに、片方は三十八秒十円というのはむしろちゃだといわざるを得ない。

以前、一極集中を避けて、完全な地方ではないに、道路交通の整備された地域に本社機能を移転した企業というのが幾つかあったのですが、それがみんな二、三年もするとあきらめてしまっただけ、また東京に本社機能を戻したということがありました。戻した理由というのは全部通信料金です。非常にコストが高くなる。これは何とかしなければいけないと思います。通信パイプのつくり方というのは、東京―横浜間に限らず、首都圏全体にいろいろなパイプのつくり方というのが考えられるわけです。そういうものを積極的に推進して、まず通信料金を安くすることが必要です。

それと似たようなことは道路にもいえることで、道路がいつまでもたっても整備されない。私はさっき246のことばかり褒めましたけれど

も、それに関連して、余りにもその周辺の道路整備というのはよくありません。環状2号というのは一体いつになったらできるのでしょうか（笑）。そういうものができていったとすると、さっきいった246のルートの情報産業の開発というのは随分影響が違ってくるでしょう。情報のアクセスに関しての通信路、それから人々のアクセスに関しての道路網というのは、情報化社会の中では相当深刻に、かつ、重大な問題として考えていくべきだと思います。

### 横浜、昨日・今日・明日

**安田** 基本的に横浜の歩みというのを振り返ってみれば、最初は日本最初のオフィシャルな開港の地でした。それから明治、大正、昭和の初めにそれなりの発展をしてきた。ところが、その中で地理的に破壊されたのは関東大震災と、戦争中の大空襲でした。その後、ほかの大都市は、戦後の復興というのが順調に進んでいきましたが、横浜の場合はどうしても東西冷戦の中で、安保条約の負担を一番強いられた街のひとつだったわけですね。

それから脱却しようやく人並みに行こうとしたときに、東京のベッドタウン化してしまっただけで、そのベッドタウン化することに対して、当初は自治体側の抵抗というのはすさまじいもの

たと思うのです。すさまじいものがあつたけれども、基本的には、人々の流れというものが、社会の流れというものに抗し切れなかった。その辺が横浜の直面した非常に大きな悲劇だったということができると思うのです。

それが、三百万都市を誇りながら、東京の第二の都市というような地位に甘んじざるを得ない、ユニークさが無いといえはユニークさが無い横浜の姿だと思えます。そういうことをいうとしかられるかもしれませんが、結局、ユニークさで持ち出されるのは何かということ「港」だけです。

ただ、唯一の救いは、これから二十一世紀にかけて大型クルーズの時代です。旅客船の時代がどうやら再来しそうな気配があるわけです。その辺だけは、京浜港、東京港が絶対足元にも寄れない横浜の一つのステータスシンボルであるわけです。唯一、それは残るかも知れない。だけどそれは昔のノスタルジアの象徴だという

とらえ方をしておいた方が無難だというふうに思っています。

寄藤 そうですね。

安田 ようやく市としての性格、つまり横浜のベッドタウン地域に住んでいる人たちが、それなりのステータスシンボルというか、また、誇りというか、そういうものを持ち始めた時期でもありません。だから、そういうものを結集して、新しい横浜の未来像というものを作りたい。打ち立てていかなければならないのではないかと

そういう点から見れば、横浜が目指すものというところ、今さら工業化の時代ではないと思えます。だから、単に情報化というようなことではなしに、高度生活文化情報といえますか、その辺のことを全部引くため、生活とカルチャーと情報と、そういうものの高度化を目指していく都市というふうな位置づけるのが、最も望ましいのではないかと私は思います。

寄藤 私も、MM21にばかり期待するのではな

くて、アリーナがオープンした新横浜や、研究所が増えている港北ニュータウン、さらには海の公園が評判の金沢地区など、いろいろな顔をもつ横浜という行き方のほうが魅力を感じますね。

ちょうど去年からことにかけて横浜市が出した幾つかの構想とか答申で、前と変わってきている点というのは、市民が最大の財産だという視点がかなりはつきり出てきていることです。

安田 いや、それは確かに市民税は高いですからね。市民が財産というのはもう名実ともにそうだと思いますね(笑)。だから、その財産をどう生かすかというのは、やはり自治体で考えていかなければいけない。

寄藤 市民をどう生かすかということ。それが本当にこれからの一番大きな課題になると思います。

△安田〓東京電機大学工学部教授、

寄藤〓㈱エポックリサーチ調査研究部長▽